

# グレゴリウス・ライシュ『哲学宝典』の「文法」図像について(続)

— 教育史的・図像学的アプローチ —

安 川 哲 夫

On the "Typus Grammaticae" in Gregorius Reisch's *Margarita Philosophica* (continued) :  
Educational and Iconographical Approaches

Tetsuo YASUKAWA

## IV ニコストラータとホーンブック

図の左下に描かれている子どもは、学問の世界に入らんと、いま大学がある町に着いたところであろう。肩からかけている鞆が、彼の新たな人生の旅立ち、これから彼が経験するであろう長い修行の始まりを象徴している。目指すは眼前にそびえ立っている学問の塔であるが、そこに至るまでには彼には学んでいなければならないものがある。ラテン語の読み書きがそれだ。ラテン語は、学術用語であるのみならず、それでもって大学の授業は行われるのであるから、何が何でもマスターしておかなければならない言語であった。

ラテン語の手ほどきをしてくれるのはニコストラータである。私は中世から近代初期の図像を多数見てきたが、ニコストラータという名が入った文法の図像は図1以外には一例もない。ニコストラータとはいったい何者なのか。調査するうちに、彼女が伝説上の人物で、当時よく知られた存在であることが分かった。たとえば、ヴェネツィア生まれのフランスの女流詩人クリスティヌ・ド・ピサン (Christine de Pisan, c.1364-c.1431) は — 彼女が若い王子に性格形成について書いた『オテアの書簡』(1450年頃) は、「節制」の図像に時計をはじめて導入した書としても有名である —、その著『女性の都市の書』(1404-05) のなかで、「理性」の口を通して彼女をこう紹介している。

ニコストラータは、当時パラスと呼ばれたア

ルカディア (ギリシア) の王の娘で、ギリシア文学に秀でた学識を有し、演説もうまく、かつ尊敬に値する雄弁をふるうので、同時代の詩人たちはみな彼女がメリクリウス神から愛されていると想像していた。だがその地で起こった変化のために、彼女は息子と彼女に従った人々とともにイタリアに赴き、パレンティヌス丘に移り住んだ。そして、この地の人々がみな野蛮であることに気づいた彼女は、彼らが正しい行いと理性にしたがって生活することができるよう法を制定した。また神の靈感を通して、この地がいつの日か高貴化され、全世界を支配するだろうと認識していた彼女は、一生懸命に勉強して独自の文字、つまり、ラテン・アルファベットを発明し、統語論、綴り、母音と子音の違い、さらに文法学の完全な手引きを確立して、これを人々に教えた。この学問が後世にもたらした多大の効用と利益に感謝して、イタリア人たちは彼女を大いに尊敬し、かつ女神と崇めてパレンティヌス丘の麓に神殿を建てた。そして彼らは、彼女を永遠に忘れないように、彼女が発見した学問に敬意を表して自らをラテン人と呼び、山の向こうのすべての国がイタリアと呼ばれることを願った。「理性」はさらに続けて、ニコストラータが後にアエネアスと同盟してローマ建国に貢献したエヴァンダー (Evander) の母であったことも告げている<sup>20)</sup>。

ニコストラータが、アルファベットの発明者としてだけでなく、言葉による文明化の担い手として考えられていたことが、ここでは重要

であろう。というのも、ラテン語は、学問を伝達するための単なる道具ではなく、それを通して得られた教養によって人々は社会や文化を発展させていくことができる、という人文主義的な言語観が、『哲学宝典』の文法図に彼女を登場させた要因のひとつであったと考えられるからである。背景として描かれた町の風景も、このことを暗示しているように思われる。

次に注目すべきは、ニコストラータの動作とその持物である。彼女は子どもからホーンブックを受け取り、もう一方の手にもった鍵で塔の扉を開けようとしている(図6参照)。ホーンブックと鍵が〈手段としての文法〉、つまり「文法の基礎」を象徴している。鞭と本とによって表されることが多かった文法図像の伝統にあって(図4の文法を参照)、この組み合わせはきわめて斬新なものである。この点を確認した上で、まず最初に、ホーンブックとはいかなるものであり、それがどのような教育機能を果たしていたのかを見ていこう。

ホーンブックとは、通常は、9×5ないし6インチの小さな木製の平板に、大小のアルファ

ベット、音節、「主の祈り」などが板に直接刻み込まれるか、あるいは、それらが書かれた一枚の紙が貼り付けられるかした、子ども用の読み書き入門テキストである。その名は、子どもたちが傷つけたり汚したりしないように、牛の角(horn)から作られた半透明な薄片で表面が覆われたことに由来している。「角本」と訳される所以である。ホーンブックにはしばしば取っ手が付いているが、これは教育上きわめて都合が良かった。なぜなら、子どもたちは片手でホーンブックをもち、空いた他方の指で、あるいは、フェスキュー(fescue)と称される小さな指示棒で、文字をなぞりながら読むことができたからである。後には、周囲に枠を設けて、カード化された教材を差し替えていくホーンブックも考案・開発された。小型軽量で持ち運びが容易なこと、比較的簡単に作れて何度でも再利用が可能なこと、また、当時一般的な教育方式であった熟達度に応じた個別学習が保証されること、こうした利点が認められて、16世紀後半から19世紀初めまでのヨーロッパでは、家庭や学校で広範囲に使用された。

その原型は、従来から利用されてきたタブラ(tabula/tabulet)と呼ばれるアルファベット板に求められるけれども、ホーンブックの歴史家 A. W. Tuer は、それとは異なる本来の意味での、つまり、角質のあるホーンブックの最も初期の記録は「1450年頃」とであると述べている<sup>21)</sup>。実際はもう少し遡ることができるようだが<sup>22)</sup>、ホーンブックが有効な読み書き教材・教具として一般に利用され始めるのは、15世紀後半からではなかったろうか。ウィーン大学の授業プログラムを図解した1465-1477年頃の手写本集(図7)は、体罰の道具をもった修道女姿の女神と、彼女の前でホーンブックを手にしてABCを学習している複数の子どもたち、それに助手(=寺男 Münster)に答で尻を叩かれている子どもを描くことで、文法を表現している。



図6：図1の部分拡大図

出典：Tuer, Andrew W. *History of the Horn Book*, Arno Press, 1979 (1897), cut 71.



図7：「文法」、1465-1477年頃、ウィーン大学の授業プログラムの手写本集より。

出典：Helmut Engelbrecht, *Erziehung und Unterricht im Bild: Zur Geschichte des österreichischen Bildungswesens*, Wien, 1995, Abb. 78/79.

以上の点を念頭に置くならば、文法の擬人像がみずからホーンブックを手にし、それを正面に向けて掲げている図1の構図にも新たな光が当てられよう<sup>23)</sup>。一言で言えば、それは、ホーンブックがラテン語学習の最新の教具であることを強く訴えている点に、大きな特徴をもっている。これは推測などでは決してない。『哲学宝典』の図像が総じて各学問の最前線を強調する傾向にあったことから、このことは当然主張されうるのである。たとえば、算術や音楽の図を見てみよう。前者では、計算盤を使うアバコス師（ピュタゴラス）とアラビア数字を駆使する筆算師（ボエティウス）との対決を前面に描きながらも、数字が入った衣服を着ている中央の算術の女神が筆算師に微笑みを投げかけるといった構図で描かれている。また後者は、ここで教えられる音楽理論が、4線譜に基づく従来のものではなく最新のものであることを、女神に5線譜と音符が記された譜面をもたせることで訴えている。ちなみに、図2や図3で描かれた文法の乙女も同様にホーンブックをもっており、文法の基礎学習とホーンブックとの結合を強調している。

ホーンブックで学ばれたのは、アルファベットの太文字と小文字、音節、単語、短文、それ

にアラビア数字であった。『哲学法典』はホーンブックしか描いていないが、文法の基礎学習はむろんこれで終わりというわけではない。子どもは次には英語で「プリマー」（Primer）と呼ばれた初等読本を通して読み方の学習を進めていかねばならなかった。

プリマーもホーンブックと並んで考案され、16世紀以降、全盛時代を迎えていく。プリマーでとくに重視されたのは、詩篇を読むことであった。16世紀イタリアのプリマーは、十字架とアルファベットで始まり、音節、「主の祈り」、「アヴェ・マリア」（天使祝詞）、「使徒信条」、「ミゼレーレ」——「神よ、わたしを憐れんでください」（Miserere mei Deus）で始まる詩篇第51篇——、「サルベ・レジーナ」（聖母マリア賛歌）を標準的な内容としていた。プリマーはすべてラテン語で書かれていた。子どもたちはまず、文字を指でなぞりながら大きな声を出して読んだ。次に彼らは文字を束ね、ba, beといった音節に結合した。そして、ミサで用いられる上述の一連の祈祷文を暗誦する傍ら、単語、語句、文章を勉強し、それが終わると、時に手本を書き写して書き方を学び、最後に、数の数え方、足し算、引き算、それに割り算を学んで基礎学習を終えた<sup>24)</sup>。

声を出して読み、聞き、記憶し、話すという口頭中心の果てしのない練習が、教師が5～6歳の子どもたちに強い教育の中身であった。一年近くかけて行われるホーンブックとプリマーによる教育は、しかし、文法そのものを教えるまでには至っていない。子どもたちは、ラテン語のさらなる修得に向けて学校か大学に入るか、あるいは、母国語の読み書き算を学習して職業に就くかの岐路に立たされる。図1に現れた子どもは前者を選択した。彼は文法の基礎を学習してきたことの証し、すなわち、ホーンブックをニコストラータに差し出す。それを受け取った彼女は、彼を次の段階へと導くべく、鍵を差し込んで学問の塔の扉を開けようとしている。

## V 「鍵」と「門・扉」の出現

ニコストラータの一連の動作は、子どもを学問世界へと誘う文法の性格を暗示している。こうした認識は当時一般化していたのではないだろうか。1486年頃に描かれたボッティチェリ(Sandro Botticelli, 1444/45-1510)のヴィラ・レンミのフレスコ画(図8)も、若者の手を引いて彼を学問の世界へと導く案内者としての役割を文法に担わせている<sup>25)</sup>。7自由学芸の一部門としてしてよりはむしろ、学問全体の基礎、入り口、案内者として文法を位置づけるこうした見方が、鍵を文法の固有の持物として出現させる文法図の母胎となったと考えられる。『哲学宝典』の図はその最も初期の事例のひとつであった<sup>26)</sup>。



図8：ボッティチェリのヴィラ・レンミのフレスコ画、1486年頃、ルーヴル美術館

ところで、鍵は、よく知られているように、キリスト教図像学では聖ペテロのエンブレムであり、天国に至る門を開く鍵を表している。文法の鍵もこれと類似の機能を果たしていたと考えられる。つまり、地上において真理を探究し獲得するための学問の扉を開くものとして。仮にそうだとすると、われわれはそこからすぐには鍵の出現を説明することはできない。なぜなら、文法が鍵で象徴されるようになるためには、まず第一に、文法の図像そのものに門ないし扉が登場して、文法がその外側に位置づけら

れなければならず、第二に、門ないし扉が出現するためには、天国や地獄の門がそうであったように、その内側の世界が明確にイメージされていなければならないからである。言い換えれば、文法がそれを含み込んで成立していた従前の学問体系から切り離され、かつ、学問体系そのものが階層構造化されて段階的に提示される必要があるのだ。『哲学法典』の文法図はこの二つの条件を同時に満たしている点でまさに画期的であったわけだが、しかしそれは一朝一夕に出来上がったものではなかった。

建物や塔のメタファーを使って門ないし扉を描き込んだものとしては、諸々の徳の論理的概念の相互連関を図解した「徳の塔」や「知恵の塔」と呼ばれる図像があった。たとえば、14世紀中頃のペン画「徳の塔」(図9)は、「謙遜 Humilitas」を基礎に据え、4枢要徳つまり、「思慮」「剛毅」「正義」「節制」の擬人像を柱に見立てて建物を造り、その上部で「堅忍不拔」と「愛徳」が門の扉を開け、入り口で「従順」と「忍耐」が待つという構図をとっている。

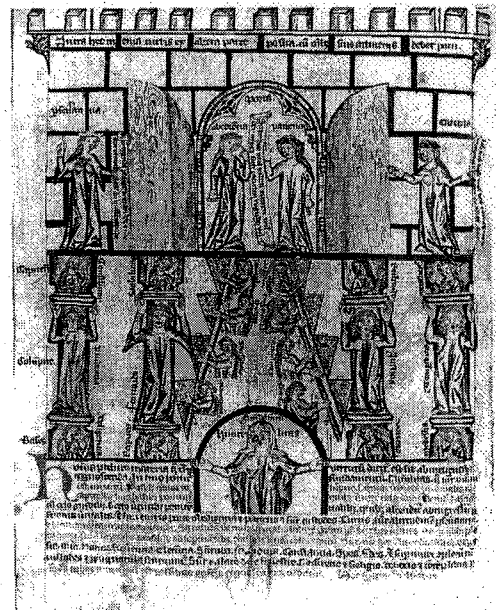


図9：「徳の塔」

出典：Engelbrecht, op. cit., Abb. 84.

また、1470年頃のニュールンベルグの木版画「知恵の塔」(図10)は、同じく「謙遜は諸徳の母である」という一文を基底部に置いて、4桁要徳の柱に支えられた巨大な要塞＝塔を描いている。図の左下には「服従」と「罰」の銘が入った扉があり、これが塔への入り口となっている。そして塔の上半分の120の石には、「神を畏れよ」「神に感謝せよ」「聖人を敬え」「世間を軽蔑せよ」「汝の父を畏れよ」「汝の母を愛せ」「節制せよ」「嘘をつくな」などの訓戒があますところなく記されている。

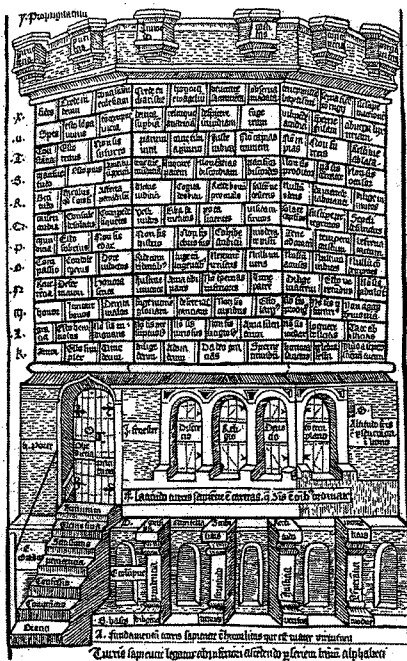


図10：「知恵の塔 Turris sapientiae」、1470年頃、木版画、ニュールンベルグ

出典：Reicke, Emil. *Lehrer und Unterrichtswesen in der deutschen Vergangenheit*, Leipzig, 1901, Abb. 21. cf. Tuer, cut 164; Mittelberg, fig. 3.

「徳の塔」や「知恵の塔」は、樹木イメージで描かれた徳の系統図と同様、宗教的・道徳的教育のオブジェクト・レッスンとして、あるいは、記憶用に用いられたであろうと考えられる。が、これらの図像が『哲学宝典』の文法図の原

型だったのだろうか。塔というメタファーの使用は同じでも、それによって表現されているものは基本的に異なっている、と私は思う。というのも、そこで描かれている門は、「わたしは門である。私を通して入る者は救われる」(『ヨハネの福音書』10:9)というキリストの象徴であり、人々が現世において神の知恵を求め、道徳的訓戒を遵守することによって得られる最終到達点を表しているからである。このことは、たとえば「知恵の塔」の門に通じる階段に、「祈り」「悔恨」「懺悔」「悔い改め」「満足」「施し」の順で記された銘からも窺い知ることができる。これに対し、『哲学宝典』の文法図で強調されているのは、あくまでも出発点としての門ないし扉である。そこでわれわれは次にこう問わなければならないであろう。かかる門ないし扉をもった文法図像は、いったいつ頃出現したのか。それはどのようなプロセスを経て誕生してきたのか、と。

これまでの調査の限りでは、その最初の現れは、1437年から39年にかけてルカ・デッラ・ロbbia (Luca della Robbia, 1400-1482) によって制作されたジョットの鐘楼の「文法」彫刻(図11)であったように思われる。作者ルカ・デッラ・ロbbiaは、14世紀にアンドレア・ピサーノによって始められた大聖堂の鐘楼彫刻を完成させるべく、5点の学芸彫刻を制作しているが、文法に関しては、彼は、年輩いた文法学者が年齢の異なる二人の少年を教育するという伝統的な構図でこれを表現した。おそらく当時の状況をそのまま再現したと思われるが、しかし、彼はそこにシンボリックな表現をひとつ付け加えていた。背景に描かれた扉、それも半分開いた状態にある扉がそれである。これは明らかに新しい知の世界への入り口である文法の役割を示唆している。



図11：ルカ・デッラ・ロbbieの鐘楼彫刻「文法」、  
1437-39年頃、フィレンツェ大聖堂付属美術館

ルカ・デッラ・ロbbieの「文法」彫刻はいささか控え目に扉を描いていたにすぎなかったけれども、15世紀後半のフィレンツェで描かれた「知識の丘」と呼ばれる板絵(図12)は、二重の意味で、すなわち、「門」の出現と自由学芸の構造化がともに表現されている点で、とくに注目に値する。この絵は実に奇妙である。平坦な荒れ地に突然そびえ立つ段丘には、下から、修辞学、論理学、音楽、天文学、幾何学、算術の順で自由学芸が描かれ、そしてその頂には神学が置かれている。自由学芸の擬人像や持物の描き方はオーソドックスなものであるが、神学の表現は少々凝っている。大司教姿の人物を前に座らせている神学の女神は、三位一体を象徴するトライアングルを左手にもち、右手で上空を指さしている。その先にはマンドルラに囲まれた神が右手で祝福のポーズをとり、左手に書物をもって大きな虹の上に座している。虹は、旧約聖書では神と地上の人間との契約の表象であり、新約聖書とくに『ヨハネの黙示録』では最後の審判の場面のキリストを表す。

しかし、この絵のデザインの革新性は、何といっても、段丘を使って学問を立体的に配置したのみならず、そこに通じる入り口付近に不釣り

り合いなまでに近代的な門を、それも門のみを描いている点にあると言わなければならないだろう。門は文法と修辞学との間に置かれており、これによって文法は他の自由学芸から切り離された格好になっている。門の手前に位置している文法の女神は、一方の手を年長の子どもの頭に置き、他方の手で年少の幼い子どもの手を引いている。「さあ、これからこの門をくぐって本格的に勉強するのですよ」と言っているようにも見える。作者不肖の15世紀後半のこの絵が、同じく、塔の入り口の前に文法の女神を配置し、文法学から神学に至るまでの全学問体系を塔のイメージで表現した16世紀初頭の文法図への重要な橋渡し役を果たしていることは、今や明らかであろう。

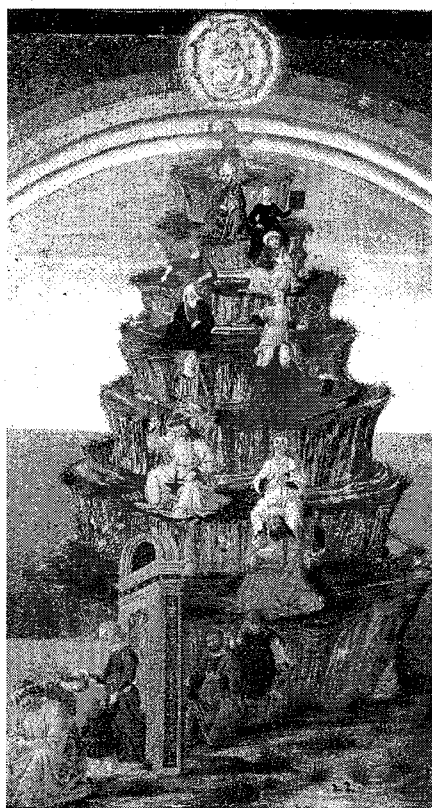


図12：「知識の丘」、15世紀後半、フィレンツェ派の  
板絵、コンデ美術館、シャンティリ(フランス)

出典：Margaret Aston ed., *The Panorama of the Renaissance*, Thames and Hudson, 1996, p. 42.

ライシュの『哲学法典』に掲載された文法図像は、文法およびその学習において、また古代および中世を通して確立されてきた学問体系のなかで起こってきた変化を図解した画期的な作品であった。このことは、鍵とホーンブックないし本をもった文法図像が16世紀を通して定着していった事実からも明らかであろう。いくつもの事例を挙げることができる。たとえば、ドイツの有名な版画家 ハンス・ゼーバルト・ベーハム (Hans Sebald Beham, 1500-1550) の「7自由学芸」シリーズの「文法」(1539, 図13) は、背中に大きな翼を付け、頭に勝利を意味するオリーブの冠を被り、右手に書き板を、左手に鍵をもった状態で、床に置かれた球を踏んでいる。翼は、それによって文法が高次の学問世界へと高まることを表しており、また球=地球を踏む動作は、文法が最終的に目指すところの真理は、すべての世俗的な考察を無視ないし軽蔑し、これを拒むことを意味している。鍵を

もった文法は、Peter Corthsの『文法：学問への鍵』(1566, 図14) の扉絵、また16世紀後半のザルツブルグ大学の「文法」彫刻 (c. 1570/80, 図15) にも同様に見られる。

## VI 文法学習の分化とクラス化

ところで、塔のイメージを借りて学問を階層構造化し、文法を“手段としての文法”と“学問としての文法”とに区分する『哲学法典』の思想は、約半世紀後の1548年、バレンティン・ボルツの「文法の塔」(図16) によってさらに発展させられていった。ここでも塔のメタファーが利用されており、そこに文法学の各要素が詳細に図解されている。塔の上階には、8つの品詞の代表者が、銘と社会の階層秩序での地位を示す礼服によって特徴づけられている。簡単に説明しておこう。



図13



図14



図15

図13：ハンス・ゼーバルト・ベーハムの版画「文法」、1539年、7自由学芸シリーズの一つ

出典：[http://www.ulg.ac.be/wittert/fr/flori/opera/beham/behamhans\\_arts.html](http://www.ulg.ac.be/wittert/fr/flori/opera/beham/behamhans_arts.html)

図14：Peter Corthsの『文法：学問への鍵』、1566年、木版画

出典：Irene Mittelberg, 'The Visual Memory of Grammar: Iconographical and Metaphorical Insights,' *metaphorik. de* 02/2002, fig. 7.

図15：ザルツブルグ大学の「文法」彫刻、1570/80年頃

出典：Engelbrecht, op. cit., Abb. 170 (Salzburger Museum Carolino Augusteum).

下のバルコニーには「間投詞・8」(聖職者)と「前置詞・7」(学者)が、2階には「分詞・5」(市民)と「接続詞・6」(商人)が、上の階には「副詞・4」(騎士)と「代名詞・2」(伯爵)が、そして最上階には「動詞・3」(王)と「名詞・1」(皇帝)がいる。「前置詞」を代表している人物は「対格」および「奪格」と交渉している。バルコニーの外側には4人の男性がいろいろな活動に没頭している。下のバルコニーの左では、弓で見張りをしている男——語源論——が語形変化群でもって標的に矢を放っている。右では作家——正書法——が巻き上げ装置で建築用ブロックを持ち上げている建設工事の親方——統語法——を手伝っている。上のバルコニーの左には、「韻律学」の世話をしているトランペット奏者がいる。塔の両側には車輪に似た大きい円があり、左のものは動詞の属性(数、人、時制ほか)を、右のものは名詞の属性(格、性、語形変化ほか)を含んでいる。右上隅の梯子の3本の横木は比較変化(原級、比較級、最上級)をシンボライズしている<sup>27)</sup>。

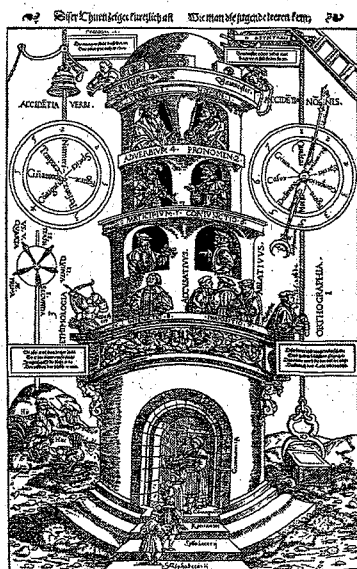


図16: バレンティン・ボルトツの「文法の塔」、1548年、木版画

出典: Reicke, op. cit., 1901, Abb. 36. cf. Bagley, Fig. 5; Mittelberg, Fig. 1.

この図の図像学上の最も大きな特徴は、文法学の基本要素が、国王や騎士、市民や商人といった世俗社会の男性人物によって社会的・空間的に表象され、二人の支配者——名詞と動詞——が建物の最上階から文法構造を支配していく構図で描かれている点にある。またここには、塔の入り口を出発点としてゴールに到達するためには、生徒たちは定められたルートに従って教育内容を連続的に獲得し、一步一步進んでいかなければならず、それが確実な進歩を約束する、という考え方が表明されていることも看過できない特徴となっている。そのルートが当時品詞を学習する際に通常とられた順序——名詞、動詞、分詞、代名詞、前置詞、副詞、間投詞、接続詞——とも異なっていることにも留意する必要がある。

こうした諸特徴を有しているまことに興味ある図であるが、私がここでとくに注目しておきたいのは、塔の入り口に位置している女性「文法」と、彼女に導かれてきた4人の子どもたちである(図17を参照)。文法の擬人像はここでも扉に鍵を差し込んで、彼らを塔の内部へと導き入れようとしている。入り口には階段があつて、一段ごとに4人の生徒が立っている。銘は、彼らが下から順に、「アルファベットを習っている生徒たち」(Alphabetarii)、「音節・綴りを習つ



図17: 「文法の塔」の部分拡大図



ている生徒たち」(Syllabatarii)、「朗読・暗唱をする生徒たち」(Recitantes)、「活用変化を学んでいる生徒たち」(Conjungentes)であることを示している。最初の二人の子どもが手にしているのはホーンブックで、入り口付近の二人が読んでいるのは本（おそらく「プリマー」）である。学習の順序を階段の段差と教具でもって示したこの図は、ラテン語文法の基礎学習それ自体の段階的プログラム化を物語っており、また当時ひとつの社会制度として誕生してきた中等教育機関のカリキュラムを示唆するものとなっている<sup>28)</sup>。

たとえば、1548年4月に授業を開始したメッシナのイエズス会のコレージュは、ラテン語文法のクラスを、「ドナトゥスを学ぶ者たち」、「文法の基礎を教えられる者たち」、それにもう一級上の「第二番目のクラス」の三つに区分し、生徒たちが最終的に「美しい表現でラテン語を書くことができ、また話せるようになること」を目標としていたが、その最初のクラスでは、生徒たちはまず、アルファベットを大声で読んで学習し、次に文字を音節を表す綴りに結合し、第三に、一連の祈祷文を学んだ後、アルファベットを書く。そして第五番目に、彼らは母国語の本を読み、罫線がある紙に書き写す実践を通して書くことを学ぶ。最後に、ラテン語文法の学習に進んで小さなカテキズムを復唱し、そして数の数え方や算術を学ぶことになっていた<sup>29)</sup>。

イエズス会の学校組織と授業は「パリの方式」に基づいていたが、最初のクラスは明らかに「プリマー」の編成に沿ったもので、プリマーとラテン語文法書との結合を示している。そこでは復唱と記憶が最重要視された。こうした基本練習を徹底的行った後、生徒たちは次の文法クラスに進んで文法規則を覚え込み、その規則に基づいて課題作文を書き上げ、それを復唱し、「純粋で正しいラテン語」の修得に励む。そして最後のクラスでは、二組に分かれて相互に質問と回答を応酬し合ったり、コンテス

ト形式で詩（韻文）を競作したり、文章や文法規則に関して討論を行ったりした。以上の三段階のコースで文法の勉強を修了した生徒たちは、次に雄弁術の修得を目的とした修辞学クラスに進級し、このクラスの修了をもって学校を卒業する。さらに学問を志す者は、哲学や自由学芸を教える学校、神学校へと進学するが、こうした学校制度上の区分によって、文法は中世の自由学芸体系で有していた地位よりも低くなり、また、初中等段階の学校それ自体にも新たな区分の観念が生まれたことで、文法を学習する生徒たちも、ABCや文法の基礎を学ぶ下級クラス（Lower school）のグループと、修辞学や古典古代の作家たちの詩や歴史書を学ぶ上級クラス（Upper school）のグループとに区分されていくことになる。

年齢や能力が異なる子どもたちが同一の教場（school[room]）で一緒に学んでいた状態から、彼らが学習する内容に応じて能力的に区分されていく、一般にクラス化と呼ばれる現象は、教育の歴史においては特筆される変化であるが、この変化も16世紀の図像にはすでに現れてきている。1492年の『文法基礎』の挿図（図18）を出発点において見てみよう。図中央の教師を中心にして、正規の年長の生徒たちは一枚の長い板の机に教科書を



図18：文法教科書の挿絵、木版画、『文法基礎』（1492年）より

出典：シヨルシュ／北本正章訳『絵でよむ子どもの社会史』新曜社、1992、153頁。

開いて座っている。互いに向かい合うように置かれている机の配置にも注目。図の手前には、背の低い長椅子(ベンチ)に腰掛けて勉強している年少の2人の子どもが描かれており、左の少年は本を手に学習している。そして右の少年はホーンブックを膝の上に置いて学んでいる(どちらも読んでいる箇所を指でなぞっている点に注目)。つまり、この図では、ホーンブックによる学習、プリマーによる学習、それに文法書による学習、の三つの場面が同時に描かれているのである。「沈黙 SILENTIVM」の銘は授業中の私語を禁ずるためのものであろう。

アリエスは、典型的なルネサンス期の文法学校(セント・ポールズ校、1509年創設)を描写した1519年のエラスムスの書簡に用語「クラス」の初出を見ていたが、クラス化の実践を示す図もほぼ同時代に現れている。その最初のものは、おそらく、1524年にドイツのオープンハイムで制作された木版画(図19)ではなかったろうか。『聖ルプレヒト伝説』に収められている図であるが、これがかつてモンローは「院内と院外の生徒のための修道院学校」と紹介していた。しかしこの図は、教師に対面している生徒たちが制服で身を包み、教師の説明を手に



図19：クラス分けの実践、木版画、『聖ルプレヒト伝説』(1524年)より

出典：Reicke, op. cit., 1901, Abb. 45. cf. Alt, I, 190..

もった教科書で追いかけている様子と、教師の右側に位置し、帽子をかぶらず、膝の上に置いたホーンブックらしきものに目をやっている年少の子どもたちとの違いに注目すれば、レベルの異なる二つのクラスを教える、いわゆる複式学級に近いものだと考えられる。あるいは、右下端に置かれた計算台に着目すれば、奥から順に学習のレベルを描いたものと言えなくもないであろう。

「1592」の銘が入った図20は、かなり規模の大きなドイツのラテン語学校の内部を描いている。きわめて有名なもので、これまでもしばしば取り上げられてきた。ときには、ルネサンス・ヒューマニストが批判した体罰による苛酷な教育のあり様を示すものとして紹介されるケースもあるけれども<sup>30)</sup>、この木版画的価値は、クラスに分けられた生徒集団が、それを受けもつ人々の指導の下で、同一の部屋で棲み分けをしながら、さまざまな内容を学んでいる光景を描きだしている点にある。詳細に不明な点はあるが、生徒たちは5つのグループに分かれて、それぞれ異なった学習に従事している。第一は、左側のホーンブックを手にした生徒集団で、教科書を片手にもった年長の生徒が彼らに文法の



図20：ドイツの「ラテン語学校」のクラス分けの実践、1592年、木版画

出典：Reicke, op. cit., 1901, Abb. 48. cf. Alt, I, 351; Horst Schiffer & Rolf Winkeler, Abb. 54. etc.

基礎を教えている。その後ろの壁の付近では別の集団が形成されていて、彼らは、壁に吊された細長い板に刻まれた文章に目をやって、それを朗読している。右後方の黒板の下では、大人の女性とおぼしき人物が椅子に腰掛けて、その左隣に立ってラテン語文法の規則を暗唱していると思われる生徒の声に耳を傾けている。右端では一人の生徒が机に座ってペン書きの練習をしている。おそらく課題作文を書いているのであろう。そして比較的大きく描かれた右中央では、笞を手にした教師の前に一群の生徒たちが並んでおり、教師から口頭試問を受けようとしている。最前列の生徒は、これまで学んできたカトー、キケロ、ウェルギリウス、オウィディウスなどのラテン語作品の中の一節を読み上げているのであろう。

以上、15世紀後半から16世紀を通して現れてきた一連の変化——文法図像、初中段階の教育および学校に生じた変化——を追いかけてながら、1503年の『哲学法典』の文法図の出現以後の教育界の歴史的位相を明らかにしてきた。そこで最後に、学問世界の扉を開ける鍵というイメージで構想された文法観が有していた思想ないし教育観が、17世紀、どのような展開を遂げていったのかを概観することで、本論文の結論にかえたいと思う。

## VII 「扉」から「門」へ：コメニウスに見る教育イメージの変化

文法の擬人像の持物が、鞭と本からホーンブックと鍵に取って代わられたことはすでに指摘してきた。ここではまず、16世紀の中等教育機関の成立・発達によって教育がさらに分化していく過程で、やがて初等段階の教育はホーンブックで、また中等段階の教育は本と鍵で代表されていくようになっていった事実を指摘しておきたい。一例として、1660年にロンドンで出版された、「文法学校への鍵」を副題にもつ文法教科書『未熟なプリスキアヌス』(図21)を紹

介しておこう。この書はそのタイトル頁に教室の授業風景を描いたイラストを載せているが、教卓に座った文法教師の左手にはしっかりと鍵が握られている(教卓の上の本にも注目)。さらに面白いことに、12世紀以来、授業場面で文法を表現する際に教師に必ずとらせていたポーズ、すなわち、教師が目の前にいる生徒に「この頁(ないし行)を読みなさい」と人差し指で指示する動作は、活版印刷の発明やホーンブックなどの教具の開発によってすべての生徒に教科書が行き渡ったことで意味をなさなくなり、教師であることを示す単なるシンボルとなっている。1660年の文法教師の右手人差し指は、何と上を向いているのだ。

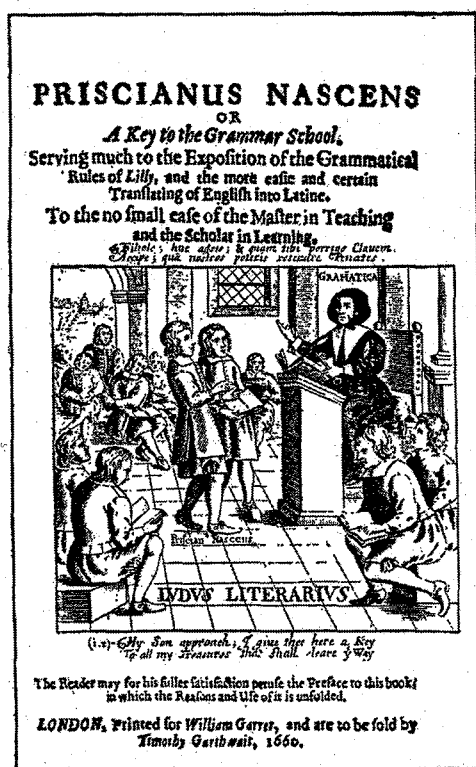


図21：文法教科書『未熟なプリスキアヌス』(1660年)のタイトル頁

出典：Eby, F., *Development of Modern Education: its Theory, Organization, and Practice*, 2nd ed., 1952, 176.

さらにもう一点指摘しておこう。その書のタイトル頁の一番下には、「私はここで汝に私のすべての宝庫への鍵を授けよう」との一文が記されている。「宝庫 Treasures」という表現がここでは重要である。鍵は宝物を得るためになくてはならぬものであった。しかも、図1や「文法の塔」(図16)で見られたように、塔の内部つまり宝物は少しも隠されておらず、実際に具体化される形で目に見えている。これをさらに身近なものとして子どもの前に提示して、ラテン語学習がより効率的に、確実に行えるようにすること——これが次の世代の教育家たちに託された課題であった。そして、これを達成していくのに尽力したのが、ラテン語教授法の改革を企てていったいわゆる「教授学者」たちであった。

なかでも、汎知学との結びつきで教育を構想したコメニウス (John Amos Comenius, 1592-1670) の活動は出色であった。彼は各年齢段階に応じた教科書に『前庭 Vestibulum』、『扉 Janua』、『宮殿 Palatium』、『宝庫 Thesaurus』というタイトルを付していたと言われているが<sup>31)</sup>、ここで重要なのは最初の二冊である。彼はまず最初に、中等教育用のラテン語教科書『開かれた言語の扉』(1631)を著して大好評を博した。そして次に、7歳から11歳までの教科書『開かれた言語の扉の前庭』(1633)を出版した。タイトル名ともなった「扉」それ自体は格別目新しいものではない。16世紀にドナトゥスの名で出回っていた文法教科書が、実は、歴史的な『小文法』ではなく、イタリア起源の後期中世の教科書であったことは、すでに指摘されているところである。この擬似ドナトゥスの文法書、たとえば、『文法家アエリウス・ドナトゥスの文法の基礎』(1597)のタイトル頁には8行詩が記されていたが、その冒頭行には、「私は最初の学芸を願う無知な人々のための扉である」(Janua sum rudibus primam cupientibus artem) という一文がある<sup>32)</sup>。文法を「扉」と同一視することは、すでに確立されていた慣習であった。

問題は、コメニウスが「扉」から「扉の前庭」へと進んだ理由である。これについてコメニウスは『前庭』の「読者への挨拶」のなかでこう語る。「すべての家に扉があるように、どの扉にもその前庭があります。家の中に入る際に、その前庭で立ち止まり、家の概観を観察し、戸口から奥の間をのぞき、そして、家の者から招かれた場合の心構えをすることが許されているのです。したがって、私たちがかつて築いた『言語の扉』の前に、この度『前庭』を建てようと考えた理由は、無意味ではないはずだ<sup>33)</sup>。コメニウスのこの志向はさらに徹底化されていく。その最終地点に位置していたのが、教育史上では世界最初の挿絵入りラテン語教科書として有名な『世界図会』(1658)であった。彼はこの書を『言語の扉』と『前庭』の前提として位置づけている。

扉のイメージでラテン語文法の教育を考える思考は、しかしながら、「すべての人にすべての事柄を」教える『大教授学』を構想し始めていたコメニウスにあっては、必ずしも十分なものではなかったようだ。彼にとっては、家の扉のイメージよりも、城門のような門のイメージの方がはるかに訴える力をもっていた。その理由を彼は『学校の改革』(1642)の中でこう説明する。「ラテン語に入る場合には、われわれは扉 Dore と呼ぶだけで十分であったが、この問題〔汎知学と普遍的教育を指す—引用者〕では、門 Gate という言葉の方がわれわれが意図するものにより近づくように思われる。というのも、扉では中に入っていくのは一人ずつであるが、門では全体が一群となって入っていくからである。扉はすべての人が入ってしまうと閉められてしまうが、門は平和な都市では常時開かれているからである。また、われわれが最初に開けようと努めたラテン語の勉強は、ある少数の人々のみを対象とした特殊なものであったが、知恵を求める欲望はすべての人々に共通である」<sup>34)</sup>。

1503年のライシュの文法図をひとつの端緒と

して始まった、塔や扉、および鍵のメタファーで教育を思考していく考えは、16世紀を通して大きな流れとなり、17世紀のコメニウスの教育世界にまで浸透していくのである。

なお、学問の構造や文法の学習に大きな転機があったこの時代には、教育の図像研究の上では看過することができないもうひとつ別の変化が現れていたが——たとえば、幼児イエスを学校に連れて行く聖母マリア、娘マリアを教育する聖アンナ、さらには教師としての聖人などをテーマにした図像の出現——、これらの検討はいずれ稿を改めて検討したいと考えている。

## 注

- 20) 以上の記述は、ウェブ・サイトに公開されている Mary Ellen Waithe, ed., *A History of Women Philosophers, 1600-1900*, vol. 3, 1991 (Kluwer Academic Publ., Netherlands) を要約したものである。http://www.geocities.com/Paris/Metro/3936/WomenPhilo2.html.
- 21) Tuer, Andrew W. *History of the Horn Book*, Arno Press, 1979 (1897), 5. この書は今でもホーンブックに関する唯一の標準的研究書となっている。
- 22) cf. Plimpton, George A. *The Hornbook and its Use in America*, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 26 (1916), 264-72. 彼は1400年頃の細密画にホーンブックが描かれた最も初期の事例を見ている。
- 23) 正面を向けて提示されたホーンブックにはアルファベットが記されているが、そこには J, U, W の文字は存在していない。I から J が、V から U と W が生み出されて26文字が揃うのは、16世紀前半にかけてであった。
- 24) 上記の16世紀イタリアのホーンブックとプリマーを使った初等教育については、Grendler, *op. cit.*, Chap. 6 'Learning the ABCs with Hornbook and Primer' を参照。
- 25) ヴィラ・レンミのフレスコ画の図像分析については、Frank Zöllner, *Botticelli: Images of Love and Spring*, Prestel, 1998, 101-112. を参照。
- 26) これ以前に鍵をもった文法図がなかったわけでは
- ない。たとえば、バーゼルの Robert von Hirsch のコレクションにある1160年頃のドイツの細密画では、文法は右手に鍵をもち、左手にもった壺を前に差し出している (see Katzenellenbogen, fig. 8). これはあくまで推測の域を出ないが、私は、この文法図像は、ソールズベリーのジョンが『メタロギコン』(Metalogicon, c. 1159) の中で批判していた12世紀中葉の時代状況、つまり、知識を金儲けの手段として考える商業主義を色濃く反映したものではなかったかと考えている。
- 27) ベルリンのナショナルギャラリーに所蔵されているこの「文法の塔」は、Heinrich Vogtherr the Elder が木版画を作り、Valentin Boltz がアルザス訛りのドイツ語テキストを担当した。最上段には、この塔が若者に文法の原理を教える方法を要約した図であることが書かれている (Diser Thurn zeigt kurzlich art. Wie man die jugendt leeren kan.). この「文法の塔」については、イレエネ・ミッテルベルグ (2002) が図像学的洞察と比喩的洞察とを加えて詳細に分析している。注4を参照。
- 28) 当時のイギリスの文法学校で採用された熟達度に応じたクラス編成が、彼らが座る椅子 (Form) や指定テキスト (Book) に応じて表現されていた事実を想起すれば、この図の特徴はより理解できるであろう。
- 29) イエズス会の教育については、高祖敏明が上智大学の「教育学論集」に発表した一連の論文——「草創期のイエズス会学校」(14号, 1980年)、「原初期のイエズス会学校の教育」(15-16, 1981-1982)、「1556年のイエズス会コレギウム」(19-21, 1985-1987)——と、Grendler, *op. cit.* Chaps. 7 and 13. を参照。後半の初学者のクラスの実践は、イエズス会の Collegio Romano の1564-65年の学年度で行われたものを参考にしている。
- 30) たとえば、梅根悟『世界教育史』247頁、吉田正晴「16世紀フランスの教育」上智大学中世思想研究所編集『教育思想史VI』51頁。
- 31) 堀内守『コメニウス研究』福村出版, 1970, 47頁。
- 32) Grendler, *op. cit.*, 176.
- 33) 井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房, 1998, 125頁より重引。
- 34) Comenius, J. A., *A Reformation of Schooles*, London, 1642, 59-60. この1642年の作品でコメ

ニウスが家の扉から塔の門へとイメージを変更させていったという事実を、私はバグリーの指摘で知ることができた。cf. Bagley, *An Invitation to Wisdom and Schooling* (1985)

[http://education.umn.edu/edpa/iconics/orbis/orbis\\_text.htm](http://education.umn.edu/edpa/iconics/orbis/orbis_text.htm)